

古田陽久さん

「呉は美しい街だといつも思う。海、島、緑が調和した人間的な街だと思

う。しかしながら、呉の街を支えてきた構造的な重厚長大産業の不振で、斜陽都市としてのイメージをまぬがれないのも事実だ」と、故郷を語る古田陽久さん(36歳)は、去る10月に発表された読売新聞主催の第7回「緑の都市賞」の論文部門で津設大臣賞を受賞した。これまでも「21世紀に向けての街づくり」を題材にした川口市懸賞論文で2年連続最優秀賞に輝いている。

現在のマンションに入居当時、役員を務めた管理組合の市内緑化活動、湖っては高校時代(三津田)に生徒会長として呉地区の花いっぱい運動の先導役を務めた経歴が、3年前に購入したワープロから独自の都

市論として生み出されていったわけだ。

川口市は埼玉県随一の都市で、映画「キューポラのある街」でも知られる街物と植木が産業基盤の街だが、東京の衛星都市として古田さんのような都内への通勤人口を大量に抱えている。一方、造船、鉄鋼と時代の不況産業を一手に引き受けた感の呉もまた、ヤスリ、筆、酒造という同じような中小の地場産業がある。職人が集まる街に独特の質実剛健な雰囲気など共通する部分が多いそうだ。

「呉には高校までいましたから、もう呉にいた時とこちらに来てからと同じ長さになりますね」

それでも故郷への思いは断ち切りがたい。呉の都市問題に話が及べば、

戦艦「大和」を復元する

「呉ルネッサンス構想」を提言!



口調も自ずと熱くなる。古田さんが指摘するのは、フェニックス計画など呉の不況を打開し地域の活性化を図るプロジェクトが打ち出されているが、箱だけ作ってはたして実際に人を集める効果があるのかという点。懸念すべきは、不況は経済だけでなく人の空洞化をもたらすこと

だ。今、在京の呉出身者は一説に5万人といわれている。その中には優秀な人材がたくさんいるに違いない。その人たちが自分の力を生かす場が今の呉にはない。頭脳流出という現状に目を向けて、この人たちをもっと活用することを考えていいのではないかというのである。

また厳しい分析の一方には社大なアイデアもある。古田さん曰く「呉ルネッサンス構想」とは、まず、フェニックス計画にもリンクさせ等身大

の戦艦「大和」を復元し港に浮かべる。ただし軍事利用ではなく、あくまでも平和目的のシンボルとする。費用は基金を全国から寄付を募る。

内部は戦争をテーマにした博物館のような常設展示機能を持たせ、ノーモア・ウォー」をコンセプトに「戦争と平和」をテーマにした、国際的なシンポジウムも開催できる一大観光メッカにする。更に広島呉道路が開通したあかつきには、広島

の原爆ドームや平和記念館から呉、江田島の三点を結ぶトライアングル構想にまで発展させられるという。

古田さんは言う。確かに実現可能つかしいだろう。だが同時に英断が必要だ。強力なインパクトを与えるような発想をしないと、申す所を退却していく気がする。余は斜陽化したとはいえ呉は個性のある街だから。